三国の平和を目指して

丸に釘抜き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三国の平和を目指して

【Ｎコード】
Ｎ２４２７Ｐ

【作者名】
丸に釘抜き

【あらすじ】
魏主導の三国同盟から2年。大陸平和にはなった。しかし三国同盟の結果各国とも内政問題が起きている。全力で内政に取り組む武将達、そんな時天の御使いが帰還する。一刀はこの混乱を乗り切れるか

プロローグ（前書き）

よくある魏ルートＥＮＤ後の話です。一刀が帰還して萌将伝の立場になっていくまでを書きます。武将の性格、口調が変わります。ご都合主義になります。コメディ、恋愛要素は薄くなります。もしよければ読んでください。

プロローグ

月が白く大きく白く輝いている。
月に想いを乗せ、願をかける一組男女がいる。
二人の想いが重なり、外史の歴史が歩みを再開する。

青年が寝ている。その周りを白い光が包みこみ光が大きく輝いた。
その後白い光は急速に晴れた後には、青年はいなくなっていた。夜空には一際大きく白く輝いた月が浮かんでいた。

青年が寝ざめるはまだもうし先になるだろう。

青年が想い人に逢うのも・・・・・・

青年がいた世界とは違う世界の少女が杯をもち月を見上げている。
悲しみのこらえた顔と大切な思い出を懐かしむかで呟く
「・・・・一刀・・・・」

会議

呉の都の建業、その城壁上に一人の少女が立っていた。中庭には大勢の賑わいに満ちている。年に1回魏、蜀、呉の武将達が集まり三国間の話し合い、取決め等を決めていたが、武官達は飲んで騒ぐことに重きを置いていた。

少女は白く大きく輝く月に呟く

「・・・・一刀・・・・」

月に杯を掲げ一気に中身を飲み干す。

「華琳」

呼ばれて振り向くと立っていたのは呉王の孫策

「何、雪連」

「何とは何よ、私は今回の宴の主人なんだから一人だ寂しそうにした客人はほっとけないわ」

「主人の割には一番騒いで飲んでいたけど」

「こんな時しかはめを外して飲めないからよ」

互いに見つめあい笑う

「で本題はなに」

華琳が切り出す

「やっぱりわかった」

「あー二人でなにしてるんですあ～　仲間外れにしないでください。」

蜀の王、桃香がふらつきながら近寄ってくる。

「ちょうどよかった桃香も聞いて」

「なになに」

雪連は意をけっして静かに言った。

「呉に反乱がおきるわ」

びっつくりして声も出せない桃香、華琳は真顔で尋ねた。
「起こるの、起こさせるの？」
「するどいわね華琳、でもねある意味あなたのせいなのよ。もちろん本当の責任と起因は私だけど」
「・・・・・・・・・話し合いではだめですか？」
桃香が尋ねる
「話し合いで決着をつければ反乱は起きない、でも民の為にもならない。」
「そうですね。」
「ま、可能性の話だから、冥琳達もいろいろ動いているは、ただ騒ぎが起こるのも覚悟していてね」
その後三人の王達は話し合いを進めていっつた。

軍師たち。（魏）

魏の都　洛陽
後漢の都にして魏の首都　後漢の宮城と魏の王城の二つある都市。

魏の王城の曹操の執務室に魏の3大軍師が呼ばれていた。
「華琳様、参りました。」筆頭軍師の荀？が声をかける。
「あなた達に伝えたいことがあるわ。要件はわかる？」
「先日の三国会議の事ですか？しかし会議の内容は華琳様にもお伝えしましたが。」メガネを抑えながら郭嘉が尋ねる。
「もしかして宮城の件ですか？」荀？が緊張して答える。
「桂花、先回りしすぎ、向こうはまだ混乱からたちなってないわ。」
「まあ～魏の都が洛陽にうつってきたのと、三国の王を正式に認めたのは大だめーじですからねー」
「だめーじ？」華琳が呟き、たの二人が緊張する。程？こと風は最近、天の言葉を使う。大切な物を忘れないようにする為に。
「傷つくという意味ですが、今の会話の流れでは衝撃が大きいといった意味ですね～」
魏は三国同盟締結後、洛陽に本拠地を移し1年後の三国同盟の記念式典に合わせ、漢王朝より
魏、呉、蜀が正式に建国された。三国が建国されたことにより、漢王朝の名目的な土地の支配権がほぼなくなくなり、官位の価値の低下を招いた。三国建国前は三国が支配している土地は建前上、漢王朝の土地であり、三国の君主達は土地及び支配権を預かったいるに過ぎない。建国し王となれば、領土、支配権が王と国のものにになり、漢王朝の枠組みから一歩外れることにになり、また大陸が三国に分割されている現状では漢王朝の直轄地はなくなった。官位も宮城で政治をすることがなくなり価値が低下したが、まだそれなりの価値はある。

「話を戻すと、呉に反乱の可能性があるといわれたわ」
「会議ではそんな話はでませんでしたが」
「当然よ、他所の国に弱みは見せれないわ。」
「察するに、南方開発とそれに伴う植民計画、豪族達の土地の利権争い、先の大戦から抑えていた不満それらがまざりあっての事でしょう」
「でも、それぐらい政治で解決できるはずよ。」
「そうですかね～。風は意外に難しいと思いますよ～」
「それはなぜ？」
「華琳様も人が人が悪いですね～・分かっているくせに。」
「桂花はわかってないみたいよ。」
「今、わかりました！！間諜を呉に派遣します。」
「稟は」
「はい、呉にとって損、と利どちらが大きくなるか気になったもので、どちらににしても孫策殿に傷がつく可能性が高いです。」
「雪連は場合によったら反乱を起こさすわよ」
「なんとそこまで」
「風、反乱が起きた場合どうすればいいと思う。」
「内容、規模によりますが、呉の体制を支持する意味で兵５００ぐらいを国境に派遣、要請があれば送る。このぐらいでいいと思います。」
「呉は乱をすぐに収めれば体制の強化になり、次の段階に進める。しかし・・」桂花が呟く
「火の取り扱いに注意しなければ、母屋を燃やしてしまう。」稟が後言う。
「・・・ぐ～ぐ～・・・」
「寝るな！」
「おっときな臭い話になったので」
「雪連には魏は口も手も出さないと言ってあるから、見守るしかないわ。どんな結果になっても」

「ところで桂花、張三姉妹に連絡をとって欲しいだけど」
「なぜですか」
「こないだ雪連、桃香と決めたことを伝いたいからよ」

軍師たち（蜀）

蜀、成都

中庭の東屋に４人の人物がお茶を飲みながらのんびりと極めて重要な話をしていた。

「華琳さんからこんな提案があって、雪蓮さんからこんなこと言われたの。愛紗ちゃん、朱里ちゃん、雛里ちゃん、どう思う」

「桃香様！このような話は、執務室か、しかるべき場所ですべきです。他の人に聞かれたどうするつもりですか！」思わず声を荒げたのは、蜀の武の象徴にして美髪公の通りなを持つ関羽

「え～天気もいいから外でお茶ものみたかったし、どうせ後でみんなに教えることだから」

「桃香様！」さらに語気を強める関羽

「愛紗さん、幸い周りに誰もいませんし。そのぐらいで」語尾が小さく上目使いで関羽に話かける雛里

それまで顎に手を当て桃香の話を聞いていた朱里が口を開く

「桃香様、愛紗さん、話が長くなりますが聞いていただけますか？」

「いいよ」

「わかった」

二人の同意得た朱里が語りだす。

「まず呉なんですが、何故反乱が起きる、起こさすという状況かというと、考えかた、立場にもよるんですが、呉は一度滅んだ後、建国されたということなのです。」

「どういうことだ」

「赤壁の戦い、建業近くの会戦で負けた。孫策さん達は蜀に来ました。この時点で孫策さんが作った呉がなくなったと考える豪族達がいます。彼らは自分たちの領地、力を維持するために魏の支配を認め協力を申し出てます。協力することで彼らは呉領の中での自分たちの存在を認めさせ、協力がなければ統治が難しと思われれば地位

が保障され、さらなる利益が得られると思ったはずです。しかし実際は孫策さんが呉に戻り、1年後には呉を建国して呉王になりました。このことにより豪族達には動揺、失望、嫉妬などが生まれたはずです。」

「でも雪蓮さんは地位、領地を保障してるよ。」

「魏の統治であれば中央と繋がりができ、うまくいけば進出できたかもしれません。飛躍する好機を失ったと感じている人もいるはずです。また国をうしなった孫策さんが華琳さんの後押しで王になったことに対する反感、逆に魏に協力したことを咎められると感じている人。前みたいに豪族達の協力が難しくなっています。」朱里がお茶に手を伸ばしゆっくりと飲む

雛里が口を開く

「また豪族達はこの2年無言の圧力を孫策さん達にかけていました。さっき朱里ちゃんが言いましたが、孫策さんが戦に負けたことにより豪族達は、孫家の力が衰えていると判断しています。もともと彼らの大部分が袁術さんから孫策さんに乗り換えた人たちなので、この機会に呉の中で孫家の力を削ぎ、豪族連合として国を動かしたいと画策しています。孫策さんはその要求は受け入れることはできません。国内の安定を第一として豪族達に接してきましたが、そろそろ我慢の限界のはずです。」

「雪蓮殿が？」

「孫策さんではなく将兵達がです。将兵、民達は孫策さん達の働きによって三国同盟ができ、大陸が平和になったと知っています。そんな彼らからすれば豪族達の動きは許せないでしょう。」朱里が答える。

「だから孫策さんは反乱が起きるようにうまく誘導し、一気に鎮圧したいんだ思います。素早く鎮圧できれば孫家を中心とした体制ができ、南方開発し国力がある程度回復したら、孫権さんに王を譲る。これが呉の方針だと思います。逆に将兵達と豪族達の対立が高まりすぎると、雪蓮さんや冥琳さんでも手綱が握れなくなってしまいま

す。」
「しかしあえて乱をおこさすのは・・・・」
「ええ、だから今まで民のこと想い妥協点を探していたんだと思います。」
「なら対策を立てないと。」
「今、話したことののなかには、我々も同じ様な課題があります。呉に対する対応と今後の内政の方針を決めたいので、会議をしたいのですが。」
「わかったみんなを集めよう。それでいい愛紗ちゃん」
「はい」
桃香は鈴を鳴らし女官を呼ぶと、皆を集めるよう指示を出した。
、

軍師たち（呉）

呉　建業

呉王、孫策の執務室

「で、どうなったの」

孫策は机に肘をつき顎を片手にのせ、窓を見ながら問いかけた。

その姿を見ながら、周瑜はイライラしているなと内心思いつつ答えた。

「結果から言えば奴らの結束を崩すのは失敗だな。ただし楊弘殿はこちらの考えを理解しているし協力は惜しまないと答えられた。」

「あーあの人は袁術の下にいたときから民の事を第一と考え政治をしていたわ。で、いつまでも私と同格意識を持ち、先の事を考えれない愚かな人たちは」

眼光を鋭くさせ、周瑜にさらに問いかける

「戦場のような目をするな。返事次第では出陣しそうだな」

苦笑を浮かべ答える

「いいか雪蓮、まだ我慢しろ。あと三月は」

「何か策はあるの？」

「ある。でも政治的決着はもうつかない。」

「失礼します。蓮華様、穏殿が参りました。」

研ぎ澄ました剣を彷彿とさせる武将が報告する

「思春、こちらに」

周瑜が手招きし、耳元にささやく

「今から、私がいいというまで誰もこの部屋の周囲に近づけるな。不審者がいたら捕えろ。場合によったら斬れ」

「はい。承知しました。」

無表情にうなき、足音を立てず部屋から出ていく

「姉様、大事な相談があると聞いて参りました。」

雪連は冥琳を見てうなずく

「報告を続ける。南部でいろいろ画策しているは、陳紀、陳蘭。山賊、盗賊退治を名目に傭兵を集めている。傭兵の部隊長には紀霊。周りの豪族達を武力で威圧し従わせ、南方の利権を独占しようとしている。」
「紀霊、まだ生きていたの。行方不明になっていたのに。」
「どうやら両名が匿っていたらしい。」
「冥琳。この事態をどうするの。」
「雪蓮、確認だが魏、蜀は呉に騒ぎが起きたらどうするといっていた?」
「魏も蜀も関与しないと確約をとったわよ」
「そうか、では今から基本戦略を伝える。」

会議が終わり執務室から出てきた穏は、同じく出てきた蓮華の顔色が青ざめているの確認し無理もないと思った。なにせ自国の王が配下に謀反を起こさせ、これを討つ。蓮華の気性では理解しても、感情が納得しないだろう。自分の執務室に向かいながら、何故呉が正式に建国されてから1年でこんなに緊張度の高い国なったのだろうか穏は考えた。
簡単言えば時間がなかったせいといえる。袁術から独立し、揚州全土を掌握し内政取り組む前に魏の侵攻をうけた。先の大戦が終結し三国同盟が結ばれたとき呉の内政機構は無しに等し状態であった。文官、官僚達は建業を落とされた時点で散り散りになっていた。その隙をついて豪族達の勢力拡大をねらった策謀。この2年で文官達も戻り、内政機構も何とか形になった。豪族達もそれがわかるかこそ、
武力を集め発言と利益を得ようとしている。それがどんなに危険なことかも認識せずに（これまでの融和政策のせいで最終的に孫家が折れると認識している。）雪蓮と冥琳は今回の騒ぎを逆手にとって中間搾取機構の豪族達をつぶすきでいる。もともと魏、蜀にはこの

手の豪族達はいない。魏は河北４州に豪族達が残っていたが、曹操が彼らに官位、役職に就くこと禁止し、官位、役職に就くならば相応の官職を用意する代わりに土地を手放せと布告。もともと先祖伝来の土地ではなく戦乱巻き込まれて豪族になった領主の大部分はこれに応じ、残った豪族たちはほとんど力はない。方や蜀では、豪族自体残ってはいるが、益州勢力の旗頭である黄忠、厳顔が現体制に忠誠を誓っており大きな問題はない。また先の大戦で合計８０万前後の軍勢が蜀に押し寄せたため土地自体が疲弊している。疲弊した土地を豪族単体では回復は容易ではない。これを機に孔明は魏と同じく土地を手放すことを提案、黄忠、厳顔も賛成したため応じるものが永安、江州を中心に多数あり、残りの者には援助との名で金を貸付、経済力を削ぎ、（劉備の徳の高さを示す効果もある）やはり力は残っていない。

本来であれば政治決着をつけることも可能であるが、戦後復興、その後起こると予想される三国間の経済戦争。これに生き残るためには体制の効率化を図らなければならない。

最近になり一部の将兵から聞こえてくる豪族達に向けた批判、そして今日の会議、もう後戻りはできない、雪蓮は容赦なく敵を殲滅するだろう。そう今日の会議をもって豪族たちは呉の最高首脳部に敵と認定された。

軍師たち（呉）（後書き）

次から魏に話を戻します。そろそろ主人公をだしていければと思ってます。

軍制

魏の王城玉座の間
「これより御前会議を行う」
猫耳フードをかぶった荀？こと桂花が開始を告げる。
「皆もしっての通り大陸は平和になった。わが軍も大陸統一の軍から、平和維持の軍に変換するために屯田兵制度を導入し襄平、北平、南皮、涼州に入植させ五胡に備えるとともに開発、開墾を始めた。これにより常備軍は２５万となる。常備軍を効果的に運用するために軍制を改め、新たなる役職を設け統一する。」
曹操は玉座より立ち上がり力強く宣言した。華琳の発言が終わるのを待って桂花が発言する。
「まず一軍を軍から師団に統一する。これに伴い兵卒も隊、属、仕、伍から、隊制度に統一する。詳しくは手元にある資料を参考にせよ」
手元の資料を見た武将達は大きくかわった軍制を見てうめきにも似た声を出す。
何人かの将が自分を見つめているのを気が付いた夏侯淵が質問する。
「華琳様このように大きく変えますと混乱が起きると思いますが」
実は秋蘭も軍制改革の草案を作った一人だが周りの将に確認をさすために質問をした。
「起きると思うが諸将の役目はこれを速やかに全軍にいきわたらせ、混乱を速やかに収めることにある。」
たったまま広間を見渡しながら答える。
郭嘉が一歩前にでて説明する

今までの魏の軍制は漢王朝の軍制を参考に状況に応じて変化させてきた。しかしこの漢王朝の兵制は
伝統のある一軍制や戦乱の時増設した西園八校尉、また師団制などが併用されていて実にわかりくい。

また将軍位も名誉職から前線指揮官のものまで多種多様であり、これもわかりにくい。兵制を統一し、将軍位及び部隊指揮官位を整理することで効率化を図る。
参考までに述べると、１０人一組で十人隊、隊長は十人隊長。十人隊が１０集まり百人隊、隊長は百人隊長。百人隊が１０集まり千人隊、隊長は千人隊長、千人隊には副隊長がいて千人隊長が戦死したとき副隊長が指揮を執る、仮に副隊長も戦死した場合は百人隊の若い番号順に指揮権が継承される。千人隊が１０集まり師団が構成される。師団指揮官は師団長。師団には幕僚軍師一名（参謀長）参軍三名（参謀）が就く。師団の上位組織として将軍が率いる軍がある。軍は師団が複数集まったときにできる。

「次に将軍の任命式を行う。」
郭嘉が宣言する。広間の隅に控えていた文官が台座を玉座の前に設置し、他の文官が技巧を凝らした箱を台座においていく。華琳は箱がすべて置き終わったのみて玉座から降り箱のの中身を取り出し読み上げた。
「夏候元譲」
呼ばれた春蘭が華琳の前に立つ
「汝を魏国大将軍に任ずる。大将軍は軍の最高位にして全軍の総指揮官である。予が動けぬ時は汝が軍を率いて敵を討て」
「夏候元譲、全身全能をかけ、魏、そして民の安寧を乱す者から守り抜くことを、この剣にかけて誓います。」
「次、夏候妙才」
秋蘭が華琳の前に立つ
「汝を大司馬及び大将軍代理に任ずる。大司馬及び大将軍代理は軍において大将軍の次席となる。平時には大司馬として軍政に当たり、有事にあっては大将軍代理として予及び大将軍が動けぬ時は軍を率いよ」
華琳は秋蘭の耳元でささやいた

「春蘭をお願いね。」
「華琳様、姉者のことはお任せください。」
ささやき返すと
秋蘭は一歩さがり声大きくしてこたえた
「夏候妙才。非才のみなれど全力を尽くします。」
次々に将軍任命が進む。
張遼は車騎将軍と騎兵総監、騎兵の育成に努め、有事の際は騎兵中心の2師団を率いて当該場所に素早く移動、近辺に展開する部隊を掌握して事態の収拾に当たる。
許緒と典韋は二人とも衛将軍に、区別するために許緒が左衛将軍に、典韋が右衛将軍に任命され引き続き親衛隊を指揮する。
李典は将軍として2個師団を統括するとともに工兵総監として武具、兵器の開発、工兵の育成、街道や橋、港等の工事、補修を総覧する。
于禁も同じく2個師団を統括する将軍に、また将兵の訓練を司る訓練総監に
楽進の将軍任命のとき騒ぎが起きた。
「楽文謙。汝を魏国将軍と警備総監に任命する。警備総監として各都市の警備隊を統括し魏の治安維持、向上に努めよ」

「はい、楽文謙将軍任命謹んでお受けします。しかし警備総監の職は辞退致します。」
「凪！」
「凪ちゃん」
思わず真桜と沙和が声をあげる。
「凪。この曹孟徳の人事に不満？」
軽い笑みを浮かべ華琳が尋ねる。
「いえ、そうではありません。」
凪は訴えた。ここまで警備隊をつくったのは隊長だと、その隊長を差し置いて警備総監には就けない。

凪の訴えを聞いた華琳は優しげな笑顔をつくり凪に何事かささやいた。ささやかれた凪は緊張していたが、次第に笑顔になった。
ささやき終わった華琳が真顔に戻り声を発した。
「楽文謙、警備総監の職受けるか！」
「はい謹んでお受けします。」
「では改めて警備総監に任ずる。しかしながら先ほどの答え王に対して無礼、よって警備総監の職を解き新たに警備総監代理に任ずる。」
「はい、楽文謙警備総監代理の職、全身全霊をもって任を全うします。」
一時はどうなるかと思った人々も安心し、ほっとしたとき華琳の発言で混乱に陥る。
「警備総監の職が空白のままでは憚りがある。よって北郷一刀を警備総監の職に任ずる。」
えーーーーーーーーーーーーーー
広間全体に広がる驚愕の声
「か、か、か、華琳様いない人間を任命するは前代未聞です。」
桂花がフードを後ろに飛ばして詰め寄る。
春蘭と霞が大笑いしている。
「ねー秋蘭様、これっていいの？」
季衣が尋ねる。
「ああ、よくは無いが、良いんだよ。」
「流流わかる？」
「わからないけど華琳様が決めたからいいと思う」
「そっかー、良いならいいんだよねー」
稟が華琳の前に進む
「華琳様、このような人事他国から華琳様が恋人を思うあまり正道から外れたと思われますぞ！」
「思わせとけばいいじゃない。」
稟が絶句する。変わって桂花が質問する。

「何か、あの男が帰ってくる情報をお持ちですか？」
「ないわよ。そんなの。」
「ではなぜ！」
「いつかは帰ってくると信じているからよ。凪も同じだし、皆も思っているでしょう。」
周りが同意する。
「隊長が私たちをこのままにするはずがないの。」
「そやなー魏の種馬はそのうち帰ってくるで。」
そんな中にこにこした風が前に進み口を開く
「桂花ちゃん、稟ちゃんあきらめましょう。王の決定がくだりました。後はお兄さんの帰りを待つだけです。まだ残りの任命式もありますので。」
混乱と騒ぎの中，式が続けられた。
こうして一刀は、本人の知らないまま警備総監になった。

ちなみに桂花、稟、風の三人は軍師将軍と太尉に任命され全軍の総軍師になった。

軍制（後書き）

今回の話の中で出てきた役職のなかで史実とかぶるものがありますが、意味、権限、内容は全く違います。またこの話のなかでは魏の将軍と呼ばれるのは任命された人たちのみです。また師団制度も私の妄想ですが、恋姫無双と萌将伝の中で師団制度があることを示す話があります。なので師団制度をかきました。あまり気にせず読んでください。

帰還０

大陸全土に噂が広まりつつある。
曰く。天の御使いが戦乱を収めるために三国同盟を結ばした。三国の王達が大陸の平和を守ると誓ったので、天の御使いは王達に後事を託し天に戻った。よって三国同盟に反対するもの、三国の王達に叛意を持つ者は天の意思に逆らうもの。

魏の筆頭軍師の桂花が手に書簡を持って主の元に訪れた。
「夜分失礼します。張三姉妹からの活動報告が届きましたのでお持ちしました。」
その声はささやきにも似た小さいものだった。
「まずはこちらを」
手にもった書簡を差し出す。
無言で受け取り目を通す華琳。読み終わり書簡を近くの灯火にあて灰にする。
「順調のようね」
「はい。魏だけではなく呉、蜀でも好意てきに受け取られています。」
「桃香、雪蓮もきちんと動いてくれたみたいね。桂花はこの状況をどうみる。」
「はい。両国にとってもこの話は利点になりますし、民達も半分以上はこの噂話を信じるでしょう。平和になったこの体制の維持、継続を願う願望から。また目端の利くものは三国体制の正統性の演出と考えるでしょう。」
うなずいてから尋ねる
「本当の狙いに気が付くものは？」
「冥琳、朱里は気がついていますが容認しています。　両国共にこの話を広めているのが何よりの証拠です。」

「対象は？」
「五分五分です。しかし先日の任命式の一件で可能性は低くなります。」
「つまり、私が恋を忘れられずこの噂をながした。愛しい人の功績を称える為に。愚かな小娘の気まぐれとして、対象周辺に伝わるよう情報をながしたのね？」
華琳の怒りを込めた瞳をみて桂花はだまって頭を下げた。
「主君を貶める悪い軍師にはお仕置きが必要だわ。桂花仕事を終えたら私の閨に来なさい。」
「はい。華琳様」
桂花は歓喜満ちた表情で返事をし退出のあいさつもそこそこに部屋を飛び出した。
華琳は椅子から立ち上がり窓から大きく輝く月を見つめ続けた。
その横顔はどこか寂しげであった。

翌日華琳は春蘭、秋蘭の二人と夕食を取っていた。
「しかし姉者にはおだろいたな、大将軍にもなれば書簡仕事も山程あるのに仕事が少しも滞っていない」
春蘭が自慢げに答える
「私だってやればできるんだ。秋蘭、季衣、流流も忙しからな」
優しげに見つめる二人
春蘭が大将軍としての書簡仕事が進んでいるには訳がある。
任命式後、将軍就任の祝いの宴の最中に大将軍就任祝いに欲しい物を華琳に尋ねられ、春蘭は答えた
「華琳様、一人の男が欲しいです。」
春蘭の衝撃的な一言から立ち直った華琳が尋ねる
「・・・・・その男の名は？」
「知りません」
「・・・・どこでしりあったの？」

「城で歩いているとき見つけました。」
「姉者、その男をどうするつもりだ？」
「私の部下にして書簡仕事を押しつ・・手伝ってもらうつもりだ。」
「では、その男を明日私の執務室に連れてきなさい」
「了解しました。」
翌日春蘭に連れられたきた男は青ざめ、手には何故か筆を持っていた。
男の名は司馬朗。地方の行政官として活躍し、その業績が認められ中央に戻ってきた痩身の中年の男である。
「あなたが私の春蘭を誑かした男ね。」
華琳から質問され、その内容に驚き青ざめている顔をさらに青ざめ答える
「滅相もございません、大将軍とお会いしたは今日が初めてです。」
華琳は笑いながら告げた
「あなたは今日から大将軍の長史に任じます。後は春蘭に聞きなさい」
こうして司馬朗は仕事途中に連れ出され、長史（秘書室長）に任命された。
司馬朗は後に
「司馬朗が一日休むと大将軍府の業務が三日は遅れる」
とまで言われるまで手腕を発揮し評価される。
余談だが書簡を持って春蘭を探す司馬朗の姿は日常風景になる。

食事が終わりお茶は飲んでいたところに、桂花、風、稟が部屋に飛び込んできた。
「失礼します、陳留から早馬です。本日昼前に陳留近郊に流星の目撃者多数あり、周辺状況の確認の為捜索隊を派遣、以上です。」

帰還１

俺が目を覚ますとそこは知らない風景が、いや見知った風景が広がっていた。
「・・・・・・・・・帰ってきたのか？　それとも夢？」
冷静に考えよう。
この質感、風の感触、土の匂、とても夢の中とは思えない。
よくよく自分の服装を見るとフランチェスカの制服を着ていた。
「この服を着ているということは夢？」
夢なら夢で目が覚めるはず、もし華琳達のいる世界なら・・・
期待と不安が入り混じりながら歩きだす。
まずは情報を集めよう。

北郷一刀は華琳達と別れてから2年の歳月が流れていた。
高校を卒業し大学に進学、その間中国の歴史（主に後漢末期）の勉強や農業土木の勉強に励んでいた。また、華琳達の世界に戻る手がかりをさがしていたがなにも見つからなかった。
そして月に戻りたいと願いをかける日々だった。

「まいったな」
呟きながらため息をつく、道を発見できたはいいが周りに誰もいない、途方に暮れていると土煙が見える。
見つめていると、だんだんと土煙は大きくなりその中から騎馬の集団が見える。その集団が見えるとおれは自然と口元をほころばせていた。騎乗しているのは魏の鎧をきた兵士、魏の旗が翻っている。
駆け出したい衝動にかられたが我慢する。
しばらくすると３０騎程の集団が５０メートル手前で止まり全員が馬から降り指揮官らしき男性がゆっくり歩いてくる。親しい人物がいないことに失望と不安を覚えたが男性がくるまで待っていた。

男性は俺の顔みるなり膝をつき、顔を伏せ肩を震わしていた。
俺は訳が分からず声をかけた。
「申し訳ないが顔をあげてくれないか、それと質問をしていいかな？」
俺の言葉に反応し顔をあげた男の顔見たとき思わず声をあげた。
「頑丘（がんきゅう）頑丘なのか！」
「はい隊長、お久しぶりです」
男の名は頑丘（がんきゅう）俺が警備隊に携わった時からの知り合いだ。もともとは野生の馬やロバを捕まえ調教して売る商売をしていたが、世が乱れ商売がしにくくなったので警備隊に入ってきたと前に聞いた。一緒に戦場に出たこともある。
「よかった頑丘がいて、それですこし質問をしていいかな？」
「はい」
「俺がいなくなって何年たった、それと華琳達は何処にいるかわかる？」
「はい、隊長がいなくなって2年です。曹操様はいま洛陽にいます。」
「洛陽？」
「はい、とりあえず陳留に戻りましょう。その間にお話しいたします。」
頑丘はそういうと伝令を呼び、洛陽と陳留に伝令をとばした。

「失礼します。陳留から早馬がとどきました。本日昼前に陳留近郊にて流星の目撃者多数あり、周辺状況の確認の為捜索隊を派遣、以上です。」
桂花の報告を受けると春蘭は席を立ち上がり出口に走っていく。
華琳も立ち上がり扉に向かう。そのとき稟のさめた声がかかる
「魏王並びに大将軍どちらに行かれる」
「決まっている陳留に向か北郷がいるか確かめる。華琳様も一緒だ」

「夜に王と大将軍が慌てて飛び出したら臣下、民はどうとらえるかお考えください。」
「ごちゃごちゃいうな！！」
華琳が口を開く
「春蘭こっちに来てお茶の続きを飲みましょう。あなた達も一緒に」
「しかし！」
「姉者、華琳様とお茶の続きをしよう。それに皆も姉者と同じきもちだ」
春蘭の肩をつかみ、諭す秋蘭
「稟、あなた言に一理あるわ、民が不安に感じる行動は慎むべきね。」
「はい」
さめた口調とは裏腹にひどく上気した表情で答える。
「話が繋がりすぎているのもきになります。」
桂花が席に着きながらしゃべりかける
「確かに最近の噂、警備総監就任話の直後だし、何者が華琳様を誘きだすのに手を打った可能性もある」
秋蘭が後に続く
「まだ流星を目撃したというだけですから、お兄さん発見の報告がきたら動きましょう。一応明日早朝から陳留に緊急視察の予定はいれましたから」
「なら待ちましょう。」
華琳はそういって再びお茶を飲み始めた。

帰還2

頑丘と馬を並べ陳留を目指す。
頑丘に魏の都を洛陽に移ったこと、それに伴い陳留の商人、住人の一部が洛陽に移り住、陳留の活気が前より無くなった事等聞いた。
俺の表情が変わったことに気が付いた頑丘が語りかけてくる。
「でも戦乱がなくなりましたし、街の治安も問題はありません。また現在の太守様もいい人で住人の評判も上々です。」
それから俺の知っている街の人々の近況を教えてくれる。
そうこうしてるうちに陳留についた。

大通りを進んでいいくと周りの人々のざわめきが大きくなる。
頑丘はうれしくなると同時に住人が一斉に押し寄せるのを警戒して部下に指示をだす。
「近迫（きんぱく）隊長に人が殺到するかもしれないから気をつけろ。」
若い部下は三国同盟後警備隊に入隊したもので北郷を、天の御使いを知らない。なので指示を受けても釈然としない。しかし周りに気を配る。
そして驚いた。
「御使い様だ」
「北郷様が帰ってきぞ！！」
「ほんとうか！」
「御使いさま！！」
「お帰りなさい」
いつもは露店で微笑みを浮かべて物静かな農家の老夫婦が手に果物を持って走ってくる。
それを見つけた天の御使いは、馬から降りて老夫婦からまるで宝物を受け取るように大事に受け取った。

一口かじり老夫婦に何事かささやき笑顔を見せた。周りから大きな歓声が上がる。その歓声を聞いた近迫は全身に鳥肌をたてた。
老夫婦だけではなく無口で気難しと評判の鍛冶屋や食堂の親父、酒場の看板娘が普段の笑顔と違う満面の笑みを浮かべ手を振っている。
「どうなっているんだ」
茫然と呟く
「気をぬくなよ。これからは忙しくなるぞ！この熱気が国全体に広がるからな！」
頑丘が声をかけてくる。
声をかけられても状況の変化に戸惑いを隠せない近迫だった。

呼ばれてる気がして振り向くと馴染みの老夫婦が果物を持ってきてくれる。
馬から降りて果物を受け取る。
一口食べる。懐かしい味が広がる。
「この桃を食べると帰ってきたと実感するよ。二人とも元気そうで何よりだ。残りは落ち着いたら大事に食べさせてもらうよ。」
周りから歓声が上がる。軽く手を振り城に向かう
城門に武官、文官が出迎えてくれている。その人垣の中から韓浩が進み出てきた。
「北郷様、お帰りなさいませ。陳留の民を代表して申し上げます。」
「・・・韓浩さん、久しぶり。韓浩さんがここに居るということは春蘭、秋蘭もいる？」
期待をこめて尋ねる。
「いいえ、現在陳留には曹操様始め、大将軍、大司馬その他の将軍、幹部の方々はいません。」
「韓浩さんは春蘭の配下の将でしょう？それと大将軍、大司馬て、誰の事？」

「今は陳留の太守を拝命し勤めています。大将軍は夏候惇様、大司馬は夏侯淵様です。」
そう聞いても今一つピンとこない
「まずは広間のほうに移動しましょう。北郷様が落ち着かれてから現在の状況と曹操様のところに移動する準備を始めましょう。すでに陳留に北郷様がいると早馬を出しました。」
その言葉に従い広間に移動した。
広間につくと懐かしさがこみ上げてくる。そんな俺を察して広間から皆退出する。
「・・・・・帰ってきた・・・・」
愛しい人達には逢っていないが同じ世界、場所にいると思うと自然に涙が零れていた。
「華琳、俺は帰ってきたぞ」

再会1

俺が落ち着いたのを見計らって韓浩が入室してきた。
「北郷殿、本日はここにてお休みくださいませ。洛陽には明朝出立すべきかと思います。聞けば食事もなさらずにここまで来られたとか、このまま出立してはお体に触ります。」
声を掛けられて自分が飲まず食わずだったことに気が付く、喉の渇きと空腹に襲われた。
「お言葉に甘えさせてもらうよ。言われてみると少しつかれたかな」
そのまま食堂に向かう。
途中で我慢できなくなり桃をかじりながら食堂につくとテーブルには粥等を中心とした軽い食事が並び、韓浩の気配りが嬉しい。
食事が終わり移動しようとしたとき再び韓浩が現れ客殿に案内された。
「俺の部屋は残ってないの？」
「はい。洛陽遷移の時北郷殿の荷物も移動され洛陽に寸分たがわず同じ部屋を作られたと聞いています。」
やりすぎだと思うと同時にうれしくなる。
「明日出発でいいんだね？」
「はい。早馬もだしましたし、どんなに急いででも深夜になります。」
「そう、なら休ませて貰うけど、明日頑丘達を連れて行っていいかな？」
「どうぞ、北郷殿の配下ですし」
「いや、今は韓浩さんの部下でしょう」
「いいえ北郷殿は魏全土の警備隊の総監ですから」
「総監。なにそれ」
「では説明します。」
俺は韓浩から警備総監という役職に就いていることを聞かされ、

また経緯を聞いて大笑いしてしまった。韓浩に礼をいい、疲れた体を休める為だいぶ早いが床についた。

早馬の第二報がはいったとき、華琳達は落ち着かないお茶会をしていたが、一刀が帰還の連絡を受けると即座に玉座に移動し、残りのメンバー達を集めた。集まった時には陳留にて一刀が休んでいること、疲労が取れ次第こちらに向かうことがしらされた。

「明朝に緊急視察として陳留に華琳様が行かれる。軍としては護衛に私以下全将軍を動員する。しかし予定にない行事の為、護衛部隊は親衛隊を中心として兵三千を率いる。」

興奮を抑えきれない春蘭が説明する。

皆、一刀を迎えに行くことだとわかっているが視察の護衛とでもしないと全員で迎えにいけない。なぜなら魏王の配下にある警備総監を王以下、魏の最高幹部が建前としては迎えに行くわけにいかない。

華琳が口を開く

「皆に注意してもらいたいことが一つある。探し人が見つかった時は城、建物の中ではなく、最初は外で迎える。」

建物の中では席次の関係があるので華琳の気遣いである。

軍師三人はこの発言を聞いて目配せした。

「後二刻後に出立する。皆準備するように」

次の日の朝華琳達は出発した。北郷一刀を迎える為に。

再会2

洛陽を出発した華琳達は陳留目指して進んでいた。
この時の行軍隊形は先陣は霞、第二陣に凪、真桜、沙和、中軍に華琳以下、春蘭、季衣、流流、桂花、風、稟、後衛に秋蘭。
王の緊急視察とはいえその一行は華美な車等は無く、戦時の行軍のままである。
先陣の霞は先触れとして街道に騎兵を先行させるともに第二陣にも指示をだし、街道の左右に物見をださせていた。
まるで遭遇戦に備えるように。
ある意味魏の首脳陣にとっては遭遇戦である。
北郷一刀を捕えるために。

霞の元に先触れから伝令がくる。
「陳留から３０名の警備隊こちらに向ってきてます。」
霞は副官としてつれてきた古参の千人隊長に指示をだす。
「お前一刀の顔おぼえてるか？」
「はい、覚えています。」
「なら先陣を引きいて一刀を保護しいや、逃がしたらあかんよ。」
口調は穏やかだが鋭い視線を向ける。
「うちは中軍に顔をだす。二陣と後衛にも伝令をだせ。」
そういうと霞は馬首を変え一気にかけだした。

華琳はに霞からの報告を受けるとすぐさま全軍の行軍停止を命じ街道脇の平原に陣を引くよう指示をだした。
第二陣の凪たち3人、後衛の秋蘭も集まってきた。
その時先陣から伝令がくる。北郷一刀を確認し保護したと皆が歓声をあげ華琳の指示を待つ。
「桂花、本陣はひけた？」

「はい、幕も張ってあります。」
「なら全員本陣に移動、本陣にて一刀を出迎える。」
「なぜですか！！隊長がすぐそこにいるのに待たなければいけないのですか！！」
凪が顔を真っ赤にして詰め寄る。
真桜、沙和、季衣、が同意の声をあげる。
流流も声をあげようとして気が付いた。春蘭以下勤めて冷静な表情をつくっていることを。
　秋蘭がさりげなく護衛の兵士を遠ざけ、華琳達の会話が漏れないように指示をだしてる
「いいあなた達、私の本心を言えば今すぐ馬を駆って一刀に逢いに行きたい。でもね先の動乱で愛しい人を亡くした民、兵士はたくさんいるわ。その者達の前ではしゃぐことはできない。国を作り、守るためには自分の感情よりも公を優先しなければならない時があるのよ。」
　言われて凪たちはうなだれたが、華琳が再度口を開く
「あなた達が喜びを思うぞんぶん表せる場所を作ってあげるし時間もあげる。だからもう少し我慢してね。あと少しで会えるから」
そういうと華琳は馬を進めた。その進みは普段よりわずかに早いものだった。

再会3

洛陽めざし馬を進める。

街道が整備されていることに感激した。

華琳に最後に渡した書簡に街道整備の計画、構想を記していたが、計画したものが実地されていた。

道幅は約１０メートル中央が４メートルの本線で両脇に３メートル幅の歩道がある。

歩道と本線の間には細い溝が掘ってあり水が街道に溜まらない仕組みになっている。

本線を通行するのは馬車と軍、警備隊であり歩行者は歩道を歩く。また本線、歩道共に石畳の作りになっており耐久性も高い。

この街道整備で馬車、歩行者の移動スピードが上がり物資の往来が増え初めている。

しかし街道整備が進んでいるの陳留から洛陽へて長安までで、第二期工事として陳留から下?、陳留から許昌までが計画されている。

街道を進んでいると前から騎兵が５騎やってくる。

騎兵がさけぶ

「魏王の行列が通る予定だ馬車は道をあけろ。歩行者はそのまま歩道のまま通行をしていいが、行列がきたら脇にひかえろ。」

頑丘がどうしますかと目で尋ねてくる。俺は苦笑しながら口を開く

「先触れの方々に申し上げる。警備総監北郷一刀、魏王に目通りしたく取次願いたい。」

声を張り上げ伝える。

「その名前を騙ると死罪に等しい罪を受けるぞ！それでも名乗るか！」

先触れの一人が血相を変えてやってくる。

「自分で名乗るのも変だが俺の名前は北郷一刀、華琳に伝えてくれるか？」
穏やかに語りかける。
　相手は驚愕と恐れを表した表情で
「どうなっても知らないぞ！」
と叫び、元来た道を戻っていった。
「どうします。」
こんどは頑丘が笑いながら聞いてくる。
「進むよ。この先に居るみたいだから」
「王の行列に進んでいくのだから面倒事が起きたら助けてくださいよ。」
「面倒事は起きないよ。華琳がいるから。」
皆を見回し口を開く
「さあ、進もう。」

　先触れと別れて5分ほど進んだら五百人程の部隊に取り囲まれた。
頑丘達は剣に手をかけたがそれを制し尋ねる。
「部隊長と話がしたい。出てきてくれないかな？」
　語りかけると部隊長らしき人物が出てきた。
「北郷様大変失礼しました。ご本人かどうかを確認させていただくのにお時間をいただきました。」
「そう、取次のほうはどうなっているのかな？」
「そちらに関しては私が責任をもってお取次ぎします。今しばらくご辛抱ください。」
男が何事かささやくと伝令が素早く離れていく。
「北郷様、張遼将軍から逃がすなと命をうけてます。不便をおかけしますがこのまま本陣近くまで移動しますのでご容赦ください。」
　まるで犯罪者みたいだなと思いつつ兵に囲まれて移動を開始した。

再会４

護衛されながら進むと方陣を引いた陣が見えてきた。陣の真ん中には懐かしい牙門旗が立ち並ぶ。
彩も鮮やかな立ち並ぶ牙門旗をみて全員ここに居ることを確認し嬉しくなり、笑みがこぼれてしまう。
取次の千人隊長が声を掛けてくる。
「北郷様ここで下馬してください。」
言われた通り馬からおりると千人隊長は護衛の警備隊に
「諸君警備ご苦労だった。ここで警備の任を解く別命あるまでここにて休息し、その後本来の任務に復帰せよ。」
「頑丘ありがとう。一番最初に頑丘が迎えに来てくれて心強かった。また何かあったらよろしく頼む。」
「北郷様のお役に立てて光栄であります。」
警備隊全員に握手をして別れた。

千人隊長に先導され広場まで来ると親衛隊が両脇に立ち並び、５０メートル奥に１０程度の人影が整列していた。
見た瞬間、華琳達だとわかり駆け出したい衝動に駆られたが、華琳が王として振る舞っているのに気づき
千人隊長をみる。
「この先に魏王曹操様、全将軍がお待ちです。どうぞ奥まで進みください。」
頷いてゆっくりと歩きだす。
歩きだすと向こうからも華琳一人で歩きだすのを確認した。
一歩一歩歩いていくと華琳の表情が見えてきた。無表情の顔をしている。
望んで覇王になったのだが、相変わらず華琳個人の自由が無いなと、顔をみながら思った。

1メートル程の距離で互いに立ち止まる。
「ただいま、華琳」
「お帰りなさい、一刀」
小さく呟く声と一瞬見せた笑顔をみて戻ってきてよかったと思った。
「北郷一刀、汝再び魏、大陸の民の為、魏王曹孟徳に協力するか！」
さっきの笑顔が嘘だったような覇気に満ちた声、表情で問いかけれる。
覇気に満ちた表情に見惚れながら懐かしい返事をする。
「俺に利用価値あるうちはせいぜい上手くつかってくれ」
俺の返事に華琳は言葉につまる
さらに追い打ちかける。
「利用価値がなくなっても道化として傍においてくれるんだろ？」
「・・・ええそうよ・」
「では華琳ともに大陸の民につくそう」
「一刀、性格悪くなったのね」
「魏王、曹孟徳だけではなく、華琳個人にも返事をしたかったからね、すこし変な答え方だったけどね」
「皆の所に行きましょう。」
華琳の横にならび歩く
皆の前に来ると華琳は向き直り兵士につげた。
「魏の将兵たちよ、天の御使いは再び我ら魏と共に歩む。天と共に大陸の安寧を守る！」
「魏国万歳！！」
春蘭が叫ぶ
つられて兵士たちが万歳と叫ぶ
北郷一刀は万歳につつまれて魏に帰還した。

孫呉騒乱０

一刀が帰還してから2か月がたった。
華琳達と再会した日は天幕の中で魏の将軍達にもみくちゃにされた後、一人一人を抱きしめ口づけをかわした。洛陽に戻ってからは宴会が3日3晩続き、宴会が終わった後は1日一人、相手を続けた。魏の高官張3姉妹を昼、夜構わずデートをし、魏の種馬は健在と証明した。
その後警備総監として各地の警備状況の確認、一刀の居ない2年間の政策、今後の政策等の方針を
教えてもらい、さらに軍師将軍、太尉に任命され軍部の将軍として師団の指揮権、軍制、軍略に口を挟め、さらに魏の内政機構がまだ整っていないこともあり、警備総監として内政にも参加していた。

華琳の執務室
華琳、桂花、風、稟がいる。
ある意味、魏の内政の最高会議とかしている。
「街道整備に関して意見があるから聞いてくれるか？」
皆が頷くの見て続きを喋る。
「街道整備第二期をすぐに始めるべきだ。場所は陳留から小沛へて下？、陳留から濮陽へて山東半島沿岸部まで、渤海、平原へて？まですぐに、許昌はしばらく凍結、また長安から武威までも第二期としてすぐに開始する。」
「なにを言ってるの許昌、宛、襄陽まで通すほうが先だわ」
案の定、桂花が反論する。
「街道を整備するのは何のためだ？」
「人、物、を素早く移動さすためです。それに伴い交流が生まれ交互理解が深まります。だからこそ蜀、呉に通じる街道整備が重要です。」

稟が答える。
「それにお兄さんの案だと莫大な出費がかかります。いずれ通さなければいけないですが予算と優先度に関していえば稟ちゃん、桂花ちゃんの言う通りです。」
「あなたには詳しくは教えなかったけど魏の国庫は余裕はないのよ」
桂花がこたえる。
稟、風が頷く。

実際、魏の財政はかなり厳しい状態だった。
原因は三国同盟を結んだことによる。
大陸統一という目的があるにせよ、戦争とは版図（農地）の拡大、市場の確保、場合によっては略奪（人、物）によって利益がでるから行う面がある。
そして魏は蜀、呉を残したことにより、利益を得ることはできなかった。（安全保障ができたことは大きいが、街道整備の遅れ、各国の問題により効果でるのに時間がかかる。）
特に魏に協力してる商人達は落胆は大きかった。安全に商いができるのはいいが、大陸統一の際新たな市場の拡大を狙っていたから、蜀、呉、魏の版図になれば蜀、呉の中枢に食い込んでいる商家の力が落ち
新たな販売網が確立できる予定だった。
そのため遷都に伴い洛陽の再開発、街道整備、将兵の屯田制等の資本投下を急ぎ行い、市場を作りだしていた。
回収する税金よりも資本投下する金額が大きく国庫を圧迫していた。

「金がないのは判るが是非通したい、理由は分かるか？華琳」
「塩ね」
「そう塩の安定供給を目的だ。塩を黄河や街道を使い涼州奥地、魏全土までは安価に安定して運べれば　大きな利益になる。」

古来より塩は官の専売で利益を上げてきた
「塩はわかりましたが、塩の生産性をあげる方法はあるの？」
桂花が尋ねてくる。
「ある。この書類をみてくれ、入浜塩田を導入したい。」
皆が読み終わったのみて声かける。
「華琳、入浜塩田の試作をすぐにでもやりたい。認めてくれるか？」
「認めるわ、真桜と相談して工兵の手配、下？の太守に試作の塩田を作らすわ」
「俺が直接行くのは駄目か？」
「ええ一刀には行ってもらいたい所があるの」
「何処に？」
「呉に行って雪蓮達に会ってきて」

孫呉騒乱1

呉に行けと言われ理由がわからずに華琳に聞き返した。
「何故、今呉に行かなければならない。街道整備に宿場の確立、宿場に警備兵を配置して街道の安全性を高めるのが重要だと思うけど？」
「確かに重要だけだ一刀以外でもできるわ、今回は凪に任せなさい。それに一刀にしかできないのよ」
華琳は説明した。
天の御使いの噂を、そしてその噂を流したのは三国の王達だと
「民の大多数がこの噂を信じているわ、だから形式だけでも作りたい。それにもう呉に使者を送ったしあきらめて行ってきてね。」
ため息をつきながら答える。
「利用価値があるなら使ってくれといったが、二か月で離れると寂しいな」
顔を少し赤らめて華琳が答える。
「仕事よ、一刀我慢なさい、寂しいのは私・・・」
語尾弱くなり聞き取れない
「おうおう、いちゃついてないで仕事しろ」
宝？の言葉で各自仕事に戻った。

呉、建業
「華琳から使者と親書がきたわよ」
呉王孫策こと雪蓮がそういって親書を冥琳に手渡す。
受けとり、読み終わりため息をつく冥琳
「魏は口も手もださないのではないのか？」
「天の御使いが帰ってきて方針を変えたみたい。」

「どうする？」
「受けざるを得ないし、国賓としてむかえる。」
「それしかないが、好きに使っていいといわれてるがどうする？」
「北郷　一刀の人物をみないと何ともいえない」
「わかった、迎える準備を進める」
「南部の動きは？」
「楊弘殿から連絡がきた、南部の山越に金をばらまき、揚州と交州の州境の開拓村を襲わせて、支配を広げてる。」
「そろそろ我慢の限界なんだけど」
「私もそうだが、いま動くと天の御使いがいるときに乱が起きるぞ」
「華琳も想定済でしょう。好きにつかっていいと言ってきてるんだし」
「雪蓮の言葉ではないが北郷一刀の人となり次第だな」
「無能なら無能なりに、有能なら有能なりに使いましょう。」
「しかし魏も南部に関して影響力を確保したいだな」
「護衛として千人を送り込んでくるのもそれが目的もあるんでしょう」
「戦場に展開するには最少の部隊だが、戦場にいたと主張するには十分な戦力だな」
「なにはともあれ南部はこれ以上放置はできない、そのつもりで対処して」

揚州の南部の開拓村に一人の女性が見回りをしている。
手には大きな戦斧をもっている。

孫呉騒乱2

揚州南部や交州は古来より中央の支配が届かないところである。
そのため犯罪者や戦火により住むところ無くした人々、税の重さにに耐え切れず逃げ出してきた人など雑多な人々が村を開拓し住んでいる。また昔から住んでいる山越と呼ばれる山岳民族が開拓した村などと土地の所有権を巡って争いが絶えない場所でもある。
しかし最近争いが無くなり、奇妙な安定した状態を作り出した三人の人物がいる。
その三人とは
陳紀、陳蘭、二人は揚州南部の太守。
紀霊、二人の元に身を寄せていた元袁術配下の将軍、現在は二人の影響下にある地域の軍を仕切っている。
三人が集まり現状と今後について話し合いをしていた。
「今は安定した状態を持続し民にこの状況を作り出したのは我々だということを認識させ、孫呉の影響を断ち切る。また我々の支配拒んでいる村には、山越や盗賊に金を渡し襲わす。その後、紀霊殿が兵を引きて村を支配下に置く」
紀霊に話しかける陳蘭、黙ってうなずく紀霊
「まったく建業に居る孫策達はこの地の現状を分かっていない。山越や開拓した村、町の長に下級官位を任命しただけで支配できると思っている。この地では力が必要ななのに。戦にまけた孫家には力がない、よって代わりに我らがこの地を支配する。独立した暁には袁術様を探し推戴する。その後帝から支配権を認めてもらう。」
紀霊が口を開く
「陳紀殿、当初の予定では孫家から南部の開発権と支配権を認めさせ、呉の中で主導権を握る予定のはずだが？」
「その予定だったが周瑜から手紙がきた。奴らは我々に任地の変更を要求してきた。我らが何年ここで苦労してきたがわかってない。

袁術様に任地を拝命しこの地を収めてきたのに、自分たちが任命したばかりの態度をとってきたわ」
「ではどうする？」
「孫家の周りでは、天の御使いの噂以降強硬論も出ている様子だ。だが我らにも援助をしてくれる方が
居る。こちらも今まで通り力を蓄える。」
「それは先ほど帝とのつながりある方ですか？」
「名前は出せないが、そう思ってもらって構わない」

集まりが終わり紀霊は馬に乗りある村を目指していた。
人気のない道まで進んだ紀霊は手紙を取り出し信用できる部下にたくした
「この手紙を楊弘殿まで届けろ」
手紙には先ほどの会合の内容が記されていた。

孫呉騒乱3

紀霊は目的地に馬を進めながら考えていた。
陳紀、陳蘭は無能ではない、むしろ有能だと評してもいい。
有能故に野心も多くもっており、そのため袁術いや張勲に僻地にとばされた。任地に飛ばす際あの張勲の事だから近隣を切り取り支配を認めるぐらいはいったと思う。実際に近隣を従え、山越、盗賊、武装開拓村を連携させ自分たちの配下に置いた手腕は並ではない。
しかし現在は中央とのつながりも出来、孫家の力が衰えていると現状認識をしている。おそらく中央、漢王朝の亡霊にそそのかされているのだろう。
それはそれで紀霊の目的に近いからこのまま放置する。
紀霊は思う
孫策、王の器をみせてみろ

手の大きな戦斧を持って見回りをしている女性のもとに部下がかけてくる。
「華雄様、紀霊将軍がお越しにになってます。」

部屋に紀霊を招きいれた。
「紀霊将軍、今日はどの用な御用ですかな」
「華雄将軍、人払いを」
頷き部下に目配せする。
人が居なくなったのをみて紀霊が口をひらく
「近いうちに、この地に戦がおきる。」
華雄が目を細め、口に笑みを浮かべる。
「敵は誰かな？」

「孫家」
「この地は孫家が収める土地ではないのか？」
笑いながら華雄が答える。
「で紀霊殿本題は？」
「私は陳紀、陳蘭、山越、盗賊等のこの地域の武力を持つ者どもを率いて孫軍と対峙する。その間この近隣の開拓村を華雄殿の自警団で守って欲しい。」
一瞬考えた華雄が答える。
「紀霊殿、戦に勝っても負けても最終的に死ぬぞ。」
「さすが華雄殿、そこまで分かりますか、陳紀、陳蘭は分かっていないので」
「ではどうして死に行く？」
「袁家の将軍としてのけじめと、武人としての死に花を咲かすために」
紀霊は説明した。
孫家は孫家の言い分があるだろうが、袁術から独立の仕方が恩を仇で返す仕方が許せない。裏切りによって死んだ部下の恨みを一矢なりとも返したい。
また武将として戦の天才孫策と対峙したい。
そして王の器があるか試してみたい。
正直に語った。

華雄は紀霊の話を聞きながら孫家と袁家（袁術）は何かと考えた。
孫堅が江東に赴任した時、江東の地は盗賊が跋扈する地であった。
孫堅は盗賊退治をするとともに民の慰撫に努め孫家の基盤を作った。
そして江東の民を守るのは孫家と意識しだす。
これが袁一族を刺激した。
袁一族は漢王朝の名門であり柱石でもある。江東の地で独自路線を打ち出し始めた孫堅を漢王朝の枠組みから外れようとしていると

みて、警戒する。
孫堅急死後、江東の地に政治介入、孫家と江東を断ち切り自分たちの影響下に置いたのは見事しか言いようがない。（逆に孫家の政治力が低い、もしくは基盤が固まりきらなった状態だった。）
介入後の袁家（袁術は）温情を見せ孫家軍団を解体したが、中核となる部隊は温存、また部隊を維持するのに不足ない領地をあたえている。（孫家がどう思うかは別）
そして袁術配下の豪族として戦場に姿をあらわす。
また袁術配下のバランスを取るために、また孫家　警戒の為、陳紀、陳蘭等を揚州南部に派遣、江東（孫家）を包囲する。
袁家の衰亡、孫家の呉国建国とつながる。

「紀霊殿の武人の心わかりました。この開拓村も紀霊殿に便宜をはかってもらっているし、私も紀霊殿と戦場に出よう。村は部下にまかす。」
「華雄殿よろしいのですか？」
「私の武をつかってくだされ」
華雄は戦場に再び立つことを決めた。

孫呉騒乱４

魏洛陽

「華琳、明日呉に向かうが、魏として呉に提案する話題、議題はどうする？」

「副使に風をつけているから、その辺は風にまかせない。」

「しかし緊張度の高い状態なのによく受け入れてくれたな」

「それだけ天の御使いに利用価値があるのよ。」

「いい、一刀もし呉に騒ぎが起きたら貴方の好きに動いていい」

「呉に協力するんじゃないのか？好きにつかっていいと伝えたのだろう」

「だからよ、一刀が直接あって呉の人物を見てきて」

外から凪、真桜、沙和の怒声が聞こえてくる。

一刀の護衛を警備隊中心の兵士で固める聞いた三人は（最初はついていくと揉めた、三人だけではなく霞、季衣、流琉もついていくと騒いだ）再訓練を申し出て実戦を経験している古兵さえ逃げ出したくなるほどの訓練をしていた。

「向こうも一刀の人物を量るつもりだからお互い様よ」

「分かったよ華琳、ところで俺の構想を聞いてくれるか？」

「いいわよ」

「将来、長江と黄河を結ぶ大運河をつくる。」

「・・・・今はまだ無理ね、条件が揃ってない」

「ああ、蜀との関係もある。でも実現すれば大きな効果がある。」

史実、隋の煬帝が作った大運河は後の唐の発展に大きく寄与した。

「だから俺が大運河の構想をもっていることだけを知っていてくれ。今回の呉の訪問でも語るつもりはない」

「本当にそうだった？」

「・・・・・・・・」
「一刀が人物を見て語るに値したなら伝えてもいい、しかし」
「あくまでも、俺個人の夢として、魏の国策には関係ないことにしてだろ」
「要件は終りね、残りの時間はお茶でも飲みましょう。」

呉
孫策の執務室に、部屋の主の他に。冥琳、蓮華、穏の４人が集まっている。
「北郷　一刀の出迎えに蓮華を国境まで出てもらうわよ」
「いいわね、いいわね蓮華？」
「承知しました。姉さま」
憮然と答える蓮華
「納得してないわね？」
「北郷　一刀とはそれ程の人物なのですか？ただの女たらしではないのですか？」
「確かに女性関係ははでよね、でも彼の官職、職分、権限をみると実質、魏の中で２番目の権限も与えられてるとみることもできるのよ」
「確かに軍事面では夏候姉妹が仕切っていますが、内政面では関与していないです。魏の三大軍師と同じ権限を与えられ、魏の主要な都市に警備隊を設置し、警備隊という実働部隊を握っている。人物評価に厳しい魏でこれだけの権限を与えられてるのは、北郷　一刀さんだけですね」
穏が説明する
「だからこそ蓮華に出迎えに行き人となりを見てきて欲しいの」
「わかりました」
「話が変わるが楊弘殿から手紙がきた、読んでくれ」
手紙を穏、蓮華にみせる
読み終わったのをみて雪蓮が宣言する。

「呉の体制を作り直す。もう我慢しない徹底的にやるわよ」

孫呉騒乱5

天の御使いこと、北郷一刀を中心とする使節団は、洛陽から宛を経由して襄陽に入り休息した後、長江を船でくだり建業を目指した。江夏付近にて孫権がひきいる呉の水軍と合流し赤壁の地で慰霊祭を行ったのち再び建業を目指した。

俺は今ものすごく自己嫌悪におちていた。

原因は慰霊祭後の軽い宴席で、孫権と口論をしてしまったからだ。

「北郷殿」

呼ばれて振り向くと陸遜さんがいた。眼鏡の奥に知的な大きな瞳に吸い込まれそうになる。

いや吸い込まれた。その大きな胸に。

意識して顔に視線を向けて挨拶をかわす。

最初は華琳の詩や書物の話、次に俺がいた世界の本の話、時々視線が胸に行ってしまう。またチョトした拍子に腕が胸に当たる。顔がにやけてしまうのは仕方ないと思う。

打ち解けたと思った時、陸遜さんが質問してきた。

「赤壁の戦いで、私達の策を見破ったのは北郷さんだと聞きました。どうやって見破ってのか教えて欲しいです。」

今までの笑顔とは質の違う笑顔で

正直に、迷いなく答える

「それは、天の知識で呉の策、結果を知っていたから、天の歴史では赤壁の戦いは呉の勝利した。でも俺は華琳、魏を勝たすため知っている知識を教えた。」

「その話本当か！！」

「孫権さん」

「蓮華さま」
「本当だよ」
孫権の顔みて返事をする
「ならば卑怯にも呉の勝利を盗んだのか！！」
「俺個人を卑怯物と思われても恨んでもらってもいいが、魏の将兵を卑怯物と思うのは許さないよ」
「祭をはじめ死んでいった者たちは死なずに済んだかもしれない。それを北郷、貴様が殺した。」
「だからそう思ってもらって構わない。俺は呉ではなく、魏の将兵を犠牲にしたくなかったからあたりまえだろ！！」
「貴様！！」
顔を真っ赤にして詰めってくる孫権、その姿を見て頭に血が上るそして思わず言ってしまった。
「ならば問う。孫権何故今生きている！」
さらに激昂して剣の柄に手をかける孫権
「蓮華様は酒に酔われている。早く介抱を」
陸遜さんが咄嗟に叫ぶ
声と同時に孫権を羽交い絞めにして部屋の外に連れ出す。
連れ出されるのを見守った陸遜が膝をつきながら
「申し訳ありません・・・それであの・・」
「魏の宴席でもよく騒ぎは起きます。それに今日は風は飲みすぎました。明日になれば二日酔いで何も覚えていないです。お兄さんもそうですよね？」
にこにこしながら風が尋ねてくる
「・・・ああ飲みすぎて何も覚えてない。」
「北郷殿、程？殿、感謝します。」
頭を下げ陸遜がたちさる。
「お兄さんがでれでれするから、こんな騒ぎにならんです。」
「ええー」
「部屋に戻ってお説教です」

孫呉騒乱６

慰霊祭の後、呉の使節団と微妙にギクシャクしながら建業に進んだ。

建業に到着したとき、城門の前で呉王孫策始め、主だった人々の出迎えをうけた。

「始めまして呉王、私が北郷、一刀です。」

「始めまして北郷　一刀、私が呉王、孫伯符。」

「ようこそ呉にと言いたいとこだけど、何しに来たの？」

いきなり質問されて面くらったが返事をかえす。

「・・・私個人では、三国同盟会議にも出てないので、呉の皆さんに顔と名前を覚えて貰いたいし、私も覚えたい。その上で相互理解ができればいいと思っています。」

「そう、でも最初から王妹と口論するのは友好使節としてはどうなの？」

挑戦的な笑顔で尋ねてくる

「宴席での酔態には申し訳ない。酒の飲みすぎで何も覚えてないのでその点はご容赦していただきたいたい。また孫権殿にも私個人としてはお詫びを申し上げたい。」

俺の返事を聞いた孫策は真面目な表情になり

「北郷　一刀殿、魏の将兵の大陸安寧の為の労苦、また命を落とされた方々に敬意とお悔み申し上げる。」

「今のお言葉、魏に携わる一人としてありがたく受け取ると共に、魏王にもお伝えします。」

「また孫家の家長として我が妹の無礼を許していただきたい。」

「宴席で騒ぎがよく起きます。魏でも大将軍がよく騒いでいます。また今回はお互い様です。どうかお気になさらずに。」

「わかったわ、堅苦しのはここまで、この後は皆を紹介して宴会、

そして明日は狩りよ狩り。楽しんでね、細かいことは冥琳が説明するから」
そういうと大声で周瑜を呼んだ。

夜、歓迎の宴が終り雪蓮の私室に冥琳、穏、蓮華が集まっていた
「一刀をどうみた？」
まず穏が口を開く
「噂通り女性には弱いですね。しかし溺れる事もないと思います。また物事の本質をみる力は持っていると判断します。」
「蓮華は？」
「・・・今日あって先日の詫びを入れました。北郷も謝ってきたのでしこりはありませんが、まだ私の中では判断は付きません・・・しかし考えさせる男です。」
「冥琳は？」
「武は将軍に遠く及ばず、知は軍師に及ばず、しかし政事は見るべきものがある。さらに呉にいれば大都督になる器がある。だが彼の物の器は王者の器、だからこそ雪蓮は真名を教えたのだろう」
「そうよ、仮にもし華琳が急死しても魏の次の王は一刀になる可能性が高いわ。魏の首脳陣は了承するでしょう。反乱、混乱は最低限に抑えらるとみたわ。」
「姉さま、北郷とはそれほどの人物ですか？」
「そうよ蓮華、人物をみる目を持ちなさい」
「現在3人の王がいるが、その他3人の王の器を持つ人物がいる。蓮華様、北郷　一刀ともう一人。」
「だから　明日の狩猟祭には私と一刀で組むわよ。その時に南方視察について語る。冥琳は風と実務の話を詰めて」
「連れて行くかわからないのに？」

「そうよ連れて行くときと、連れて行かない時両方を、どうせ両方考えてあるんでしょう？」
「考えてあるが、私は狩りを楽しめないな」
「何言ってるの始めから分かっていたくせに」
そういうと雪蓮は笑って杯を傾けた。

孫呉騒乱7

広大な森から開けた平原にある小高い丘陵の上で冥琳と風が狩りの様子を見守っていた。
「今回の狩りはずいぶん大がかりですね？」
「もともと予定していたものだし、天、地の恵みに人が感謝をささげる祭だ、そこに天の御使いがいる。大がかりになるのも仕方がない」
風は冥琳の発言に頷きながら冥琳の言葉の意味を理解した。
呉は正式に今回の訪問で北郷　一刀を天の御使いと認める。また天の御使いの歓迎を兼ねた狩りで軍事教練を行っている。
「今回の狩猟祭は誰が取り仕切っているのですか？
「計画自体は穏を中心につくったが現場の差配は亜莎がしている。」
そこまで教えるということは本題が近いと感じ冥琳に尋ねる。
「狩りはいつ終わるのですか？」
風の視線の先に本陣から旗が振られ角笛、鐘、太鼓、勢子の声が森から上がる。

蓮華は本陣で亜莎の指示で勢子達が動き出すのを見ながら昨日の夜の北郷　一刀との会話を思いだしていた。
互いに慰霊祭での件を詫びたあと北郷に聞いてみた
「何故生きていると問われたとき、生き恥をさらしているのかと侮辱されたのかと思ったが、冷静に考えると違う意味があると思う。その意味がわかるようで分かるようでわからない。教えてくれないか？」
「俺もうまく言えないが、王や王族、国の中枢にいる人は民から税で生活している。このことに異論はないよね？」
「異論はない。だからこそ我らは民の為に政を行う」

「そうだね、だけど・・怒らないで聞いて欲しい。国や王は民の生き血も吸っている。盗賊が出て退治する。盗賊だけど民、それを鎮圧する兵士も民、戦に参加している兵士も民、どんな名君でも民の血を吸っている。ましてやこんな時代だから。魏、、呉、蜀も同じだと思う。」

咄嗟に反論できない私をみながら続ける

「民にとって税をとり血を吸う存在でありながら王や国の責任者は、国の旗頭であり象徴である。民達は王達が示す理想が確実に政に反映されてれば、血を流すこともやぶさかではない。周りの人や次の世代に受け継がれていくと信じてくれているから。」

「だからこそ王は生きなければいけない。民に道を示さなければならないから。俺はそう思う」

「・・・・・戦に負けてもか？」

頷く北郷

「だが戦に負けて国を亡くし、民がいなくなったらどうする？死んで往った者たちになんと詫びたらいい、信じたくれた者たちに顔向けができるのか。王としての責任をどうするのだ！」

「それは王個人のあり方だと思う。だけど蜀は民がいないとこから始めて建国された国だよね。俺の考えを孫権さんに押し付ける気はない。ただ俺みたいな考えもあると知って欲しい。その上で決めるのは孫権さんだから」

「一刀、なに難しい話してるのこっちでお酒飲みましょう。あなたが主賓なんだから」

姉様に腕を取られ曳き摺られていく北郷の後姿を見ながらもっと話がしたいと思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2427p/

三国の平和を目指して

2011年7月21日20時04分発行